The Akita University Post

Wednesday, November 30, 2011　第15号

AUPブログ
開設しました

発　　行　AUP　秋田大学報道局
主　　筆　　菅原　成美
編集デスク　　佐藤　禎晃

学生ボランティアが見た被災地のいま
留学のすすめ　対談：秋大×国際教養大
自然エネルギーによる発電の研究とは？
秋田百聞～秋田大学で働く～
大学近くに模型店開店
陸上競技場リニューアルオープン

秋田大学復興支援団体AKITAID
被災地のいま
震災から8ヶ月…変化するニーズ

秋田大学復興支援団体AKITAIDは春から被災地への学生ボランティア派遣を継続的に行ってきた。そんな彼らは、震災から8ヶ月が経ったいま、被災地で求められるものが当初とは変わってきていることを感じているという。AKITAIDメンバーの桐生健太郎さん（医学部医学科4年）は「自分たちは春から一緒に片付けてきて、ようやく綺麗になったと感じた。けれど被災地の人はまっさらな土地を見て何もなくなってしまったと感じていた。」とボランティアの目から見た被災地のいまを語る。被災地でのボランティア活動は、手作業でできる瓦礫の撤去作業にめどがつき、現在は仮設住宅に住む人同士のコミュニケーションの手助けや精神的ケアといった活動に移ってきているのだそうだ。瓦礫の撤去にめどがつく、ときくと被災地が落ち着いたかのように思えてしまうが、被災地の人からすると決して落ち着いたなどということはない。ボランティアとして瓦礫の撤去作業に従事していた桐生さんはそこに自分たちと被災地の人とのギャップを感じたという。

無秩序な状態から瓦礫をよけ、道路が整備され、はたから見れば綺麗になった印象をうける。秋田でなんの支障もなく暮らしていると、震災からずいぶん時が経ったように感じてしまうが、被災地の方からすれば、先の見えない状況はまだなにも変わっていないのだ。被災地でのボランテイア活動を続けてきたAKITAIDはこのギャップを実際の現地の状況を知ることと、知らせることで埋めていきたいという。また、被災地の人が今何を必要としているのかを常に考え活動に反映していきたいと今後の活動への意気込みも話してくれた。今後は、他団体とともに被災地の受験生への学習支援を行っていく予定だという。また、目処が立ったとはいえまだ残っている瓦礫の撤去作業も引き続き継続していくそうだ。

先に書いたようにAKITAIDは春から被災地への学生ボランティア派遣を継続的に行なってきた。被災地でのボランティアは現地までの移動方法や用具の準備などがネックとなり、行きたいという気持ちがあっても尻込みしてしまう人が多い。そこでAKITAIDは秋田学生復興支援ネットワークの参加団体として土日に学生ボランティアの派遣を行っている。秋田学生復興支援ネットワークは、学生として被災地の復興に何かできないかと大学の垣根を越え集まった学生団体だ。各大学からボランティアを募り、事前にボランティアセンターに登録、バスで現地への送迎を行っている。また安全靴など個人では入手しづらい用具の用意や、けがや破傷風についての注意、ボランティアの心構えの説明といったボランティアへの支援も行っている。この活動によって「今自分に出来ること」を実際にボランティアという形で行動にうつすことができた学生も少なくない。

また、「向こうに行くだけがボランティアじゃない。どこにいても出来ることを考えたい。」と語る桐生さんは夏休み中個人でも被災地での祭りに参加するなど精力的に活動している。AKITAIDはボランティア派遣のみならず、世界中からよせられた支援に対する「ありがとう」の気持ちを表すTシャツの制作・販売や、他大学や他県の復興支援団体と交流し連携した活動を模索するなど、様々な角度から復興支援に向けた活動を行なっている。支援の方法は一つではないのだ。いま私たちに何ができるのか。震災から8ヶ月が経ついま、改めて考える時がきている。

（菅原　成美）

（写真上）気仙沼はまらいんや祭りの様子。桐生健太郎さん（医学部医学科4年）はウサギの着ぐるみを着て祭りを盛り上げた。
（写真下左）AKITAID、被災地でのボランティア活動時の集合写真。
（写真下右）ロシアからの寄せ書きとAKITAIDメンバー。着用しているのは同団体が世界へ支援の感謝を表すため制作したTシャツ。

秋

学内を歩けば、黄色や色鮮やかな落葉が絨毯のように広がる。長い夏休みが終わり秋がきたかと思えば、冷たい風に冬の予感。秋田でも初雪が観測され、あと数週間もすれば色鮮やかな絨毯は雪の白に変わるだろう。

この季節になると、入学当初、「秋田で雪と戦うな」と熱弁を振るわれた先生の言葉を思い出す。太平洋側から来た私にとって秋田の雪は正に豪雪だった。成る程これは確かに戦っては負けると納得したものだ。早々に白旗をあげた私に秋田の冬はいくつもの楽しみをくれた。童心に帰って友人とした雪遊び、月夜に光る見事なつらら、寒い夜に人と囲むお鍋の美味しさ、ついでに熱燗も。秋田に来て4度目の冬、今年はいくつ冬の楽しみを見つけられるか。

さて、本格的な冬の到来を前に多くの部活動、サークルが幹部の代替りの時期を迎えている。一年間の仕事を終え肩の荷を降ろす人もいれば、これからの一年に向け少しばかりのプレッシャーを感じている人もいるだろう。我らが秋田大学報道局はというと代替りは少し先に成るのだが、実際のところは既に移り変わっているといえる。就職活動に卒業研究と右往左往し頼りにならない主筆のもと、優秀な後輩たちは自分たちでめきめきと成長してくれているのだ。ミスコンテスト、取材、動画の作成…周囲の人々に支えられながら一つ一つ形にしてきた彼らなら、来期からの活動も安泰だろう。既に引退気分の不出来な主筆である。

秋田の長い冬を迎え一冬超えれば、出会いと別れの季節、春が来る。人も季節も時とともに変わっていく。4年目の冬を大切に過ごしたい。

（菅原成美）

留学のすすめ

最近、「日本の若者は内向的で、外に出ない」と叫ばれるようになった。この傾向は学生の留学事情にも影を落としている。現に、OECD等の2008年統計によると、日本人の海外留学者数は対前年「約11%減」と示された。私たち大学生が海外で学ぶとは、どういうことなのだろうか。対談を通して留学の経験的意義とハードルについて考えてみた。

学生対談 秋田大×国際教養大

加賀谷 靖さん（写真　右）秋田大学4年　日本・アジア文化選修
丸山 豊さん（写真　左）秋田大学4年　欧米文化選修

数年前から秋田県の「国際教養大学」が注目を集めている。地方の公立大学でありながら、留学を卒業要件とするなどのユニークな試みを行っている新しい形の大学だ。その国際教養大学と秋田大学の留学経験者、計4名に集まっていただき、留学に関する考えや様々なエピソードを語っていただいた。

―留学先の場所とその印象はどうでしたか？

濱屋　アメリカ ワシントン州スポケーンのゴンザガ大学という大学に行ってきました。ここは学生も先生もオープンで、「やりたいことはやる。やりたくないことはやらない」とアクティブな態度が求められました。

高橋　私はアメリカ ミネソタのハムリン大学です。小さな大学で学生も先生も家族みたいでした。着いてすぐに手術、入院することになってしまったのですが、何かトラブルがあったら土、日でも駆けつけてくれましたよ。

加賀谷　韓国の圓光（ウォンガン）大学校に行きました。ものすごく整備された場所で、大学の中がデートコースになっていたりもします。

丸山　僕は自分でプランを作りました。まず、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学の英語力養成コース、その次にウェストタウンカレッジで英語教育を学びました。現地の学校での教育実習も経験しました。

濱屋 雄太さん（写真　右）国際教養大学3年　グローバルビジネス課程
高橋 美帆さん（写真　左）国際教養大学4年　グローバルビジネス課程

―この留学先を選んだ理由をお教えください

高橋　単位は十分だったので、AIU（国際教養大学）でとれない「環境」や「音楽」についての授業がある大学にしました。また、秋田よりも都会で生活してみたいとも思っていました。

濱屋　教員数が少ないから、ここで取れない授業を留学でとるのもいいですね。僕もジャズギターの授業など、とりたい授業があったのは大きな理由でした。

加賀谷　僕はコリアサークルをきっかけにして、韓国語で話したくなりました。

丸山　バンクーバーは世界一住みやすい都市でも有名ですし、都市と自然が共存している環境に惹かれたからです。学校を選んだ理由は質の高い授業だという友人の薦めからですね。

―留学先での授業はいかがでしたか？

濱屋　バリバリ感があります ね。日本での5倍は勉強しました。

丸山　3週間の教育実習でカナダの教育を見ることができたのは大きかったです。日本とは違った授業の雰囲気や、自分の気持ちを率直に伝え合う生徒の姿勢には驚きました。

―留学先での経験

加賀谷　飲み会がつらかった。飲み会で行うゲームを覚えるのも大変だったし、最後までついて行ったら、朝の5時に辛いちゃんぽんを食べるのにもびっくりしました。

高橋　恋愛やショッピングなど、女の子同士の話は同じでした。

丸山　シェアハウスしていたカナダ人にパソコンを盗まれたのはショックでした。そのあと警察から事情聴取を受けたり保険の手続きをしたり…。精神力と英語力がかなり試されました。今からするといい経験だったのかもしれませんね。

―留学によって得た一番大きなものは何ですか？

みなさん　友達です！

濱屋　留学先を離れるときに、車の中でアメリカ人の友人と泣いて別れを惜しみました。また、友人の存在がコミュニケーション能力にもつながります。

―大学の留学支援について

高橋　1対1の交換留学を国際教養大学では行っているので、アメリカの私立大学でも費用が掛かりません。

丸山　秋田大学から英語圏へ行く場合、専門性を高めるための留学（学部留学）には比較的充実した支援があります。最近は短期の語学力養成のプログラムができてきているので、発展させてほしいですね。

加賀谷　韓国では英語の授業が、普通の授業後にも行われていたのに驚きました。秋田大学は入る前のイメージより英語をやらなかった感じがします。

濱屋　僕も国際教養大学の英語の授業がベストとは思いません。もっと、レベルを上げても良いと思います。

―企業の国際化、グローバル社会などといわれていますが、必要な力は何だと思いますか？

高橋　やはり、コミュニケーション能力は大切。

丸山　僕はディスカッション能力が無いと、留学後に気が付きました。英語ができても、ディスカッションの訓練は必要です。

加賀谷　文化理解も大切ですね。韓国で就職しようとも思いましたが、飲み会がつらいとは知らなかったですし。

濱屋　日本人の文化理解への意識は低い。

丸山　ネットで得る知識とは違いますね。

―これから留学を考えている学生に向けて

濱屋　どんな自分になりたいかを考えるべき。理想との差はプロセスを作って埋めていけば良いです。

高橋　度胸があれば大丈夫！相手の常識に収まっていてもしょうがない。何でもやってみてください。

加賀谷　働け、そして行け！行けば、必ず何かが起きます。

丸山　自分に必要なものが何かを、目標として考えてください。

国際教養大学 世話人
佐々木 優さん
濱田 俊太郎

企画・構成

留学に伴うハードルと努力

全国から国際教養大学に集まった学生には、留学前にTOEFL PBTテスト550点のクリアが課される。四年間で卒業する学生が、5割を切るほどの高いハードルだ。学生は語学習得のみを目的としているわけではないので、留学先の大学で通常授業を理解する能力が必要とされるのである。留学中の勉強や経験はもちろん重要だ。しかし、それが留学前の準備や努力の上に成り立っていることを見逃してはいけない。

秋田大学では教育文化学部生で、英語圏への留学を希望する場合、TOEFL iBTテスト73点(PBT換算すると533点)をクリアすることが交換留学生として指定校に推薦される条件となっている。秋田大学国際交流センターの宮本律子教授（アフリカ言語学文化人類学）は、「秋大に限らず、英語圏への留学は高い英語力が要求される。まずは入口に登る努力をしてほしい」と秋大生の受け身な姿勢を指摘する。

留学に様々な魅力があることはわかるが、英語圏のみならず、そこに至るまでの道のりは易しいものではない。単純なイメージやあこがれを抱いてしまいがちだが、事前のしっかりとした準備があってこその留学。それをふまえた上での一歩は大きなものになるだろう。

（濱田　俊太郎）

AUP
AKITA Univ. Press

日本の未来のために今考える

～あの原発事故から学ぶこと～

福島第一原発の事故は、あまりにもショッキングだった。あれほど信頼していたはずの日本の技術が、様々な立場の人間の感情がもろくも崩れ去る瞬間を、我々は体験してしまったのだ。

原子力は必ずしも悪ではない。しかし、大量の原子力発電所を抱えるアメリカやフランスと日本を比べると、地理的にも法的にも条件が違いすぎることが今回浮き彫りになった。燃料となるウランはあと85年で枯渇するという。化石燃料と同様に有限であることを忘れてはいけない。起きてしまったことは仕方がない。今はこの問題に向き合い、その解決策を考える時ではないだろうか。

一次エネルギーの乏しい我が国で「持続可能なエネルギーは？」というと、真っ先に自然エネルギーがあげられるだろう。しかし、自然エネルギーはその供給量が場所、時間によってまちまちで安定せず、利用しにくいという問題がある。

その問題を解決するのが、水素である。自然エネルギーで電力を起こし、その電力で水を分解して水素を得る。水素は酸素と反応しながら燃焼することができる。つまり、水素は燃料なのだ。不安定な一次エネルギーから得た電力をそのまま流通させるのではなく、それを利用して安定した二次エネルギーを作るという考え方である。「電気を貯めることは難しいですが、水素という燃料の形にしておくことで簡単に貯めることができ、そこから安定した量を供給できます。」と秋田大学工学資源学部機械工学科足立高弘准教授は語る。特殊な合金に水素を吸着させることで、気化や液化の状態よりも安全に取り扱うことができ、輸送も楽になるという。

さらに近年では、海洋の温度差を利用した海洋温度差発電の研究が進んでいる。

海洋温度差発電とは、（図1）のように表層の温海水と深層の冷海水の温度差を利用し、沸点の低いアンモニア液を作動流体として流すことによって、海水のみで発電するというもの。15℃～25℃の水温差があれば、世界中の海洋どこでも利用可能である。わが国では、佐賀大学理工学部が大きな附属研究センターを有し、研究を進めている。佐賀大学海洋エネルギー研究センターの試算では、日本の経済水域では年間約1011×103 kwh(キロワット時)、原油にして約86億トン分に相当する電力が得られるとしている。比較的安定した出力が期待できるが、日本列島近海では温度差が少ないため、遠洋に発電プラントを積んだ船で出かけて行き、そこで得た電力で水素に変える手法が現実的だ。

もしかすると、地方部で自然エネルギー由来の水素を作り、それを都市部で利用するといった時代が来るのかもしれない。そうすれば発電事業や、水素製造事業が地方部の新たな主力産業になるだろう。

このような将来を考えた場合、東北地方は非常に有利なのではないだろうか。

東北地方は、すべて海に面しているために港がある。海洋温度差発電のプラント船を停泊することができ、水素取り扱いの拠点となる。また、日本に18カ所ある地熱発電所のうち、約4割にあたる7カ所は東北地方にあるし、風力発電施設も東北には10カ所ある。

自然エネルギーを利用する発電施設を新造するとコストがかかってしまう。しかし、今ある施設を有効に活用することから始めれば無理のない運用ができ、成長が見込めるはずだ。東北地方の自然エネルギーを利用した発電施設で水素を製造し、それを販売・活用するという取り組みがなされれば、東北地方の復興・発展と、日本のエネルギー戦略の変換という問題の解決につながるのではないだろうか。

また、足立准教授の研究室では、回転する円すいを用いた水質浄化装置の開発および研究に取り組んでいる。水面で円すい体が高速で回転すると、その円すいに沿って水が上ってきて数マイクロメートルの薄い膜を形成する（図2）。それが、限界に達したときに細かな霧となり飛散するというもので、本来はそのサイクルで水中の酸素濃度を向上させるための装置だが、その霧に放射能吸着材などを混ぜてやれば、効率のいい放射能物質除去装置に応用できるという。水源や水を張った田畑で使用することができるという。「フランス製やアメリカ製の装置よりもシンプルなので、輸入するよりコストがかからないのではないでしょうか。」と足立准教授は語る。また、津波をかぶり塩害が起きてしまった田畑にも水を張ってやれば応用が可能である。

今回取り上げた自然エネルギーの利用方法も、足立准教授の水質浄化装置の応用も、絵空事だと指摘する方もいるだろう。それでもこれからは確実にエネルギー源のシフトを考えなければならないし、放射能物質の吸着剤の開発も国内で成功しているので、それを組み合わせて効果を実験する価値は充分にあるはずだ。

昭和の日本の技術者たちは、考えもしなかったようなウルトラC級の発想を連発して、世界を驚かせた。首都高速道路の日本橋ジャンクション、ロータリーエンジンの開発などがそうだ。当たり前のように不可能を可能にしてきたのだ。そうしたチャレンジを戦後60余年の間にやってきた国民が、今になって目先の損得勘定だけにとらわれて、開発の歩みを止めようとするのはいかがなものか。可能性のあるものを排除しなかったからこそ、日本の成長があったのではないか。

あの震災は、我々の心に深い悲しみのつめ痕を残す惨事だった。それと同時に、日本人の価値観を見つめなおさせる出来事でもあったと思う。あらゆる可能性を信じて、本当の国益とは何かという考えを、ひとりひとり持って行動していくことが復興への強い原動力になるのである。

（佐藤　禎晃）

図１　海洋温度差発電

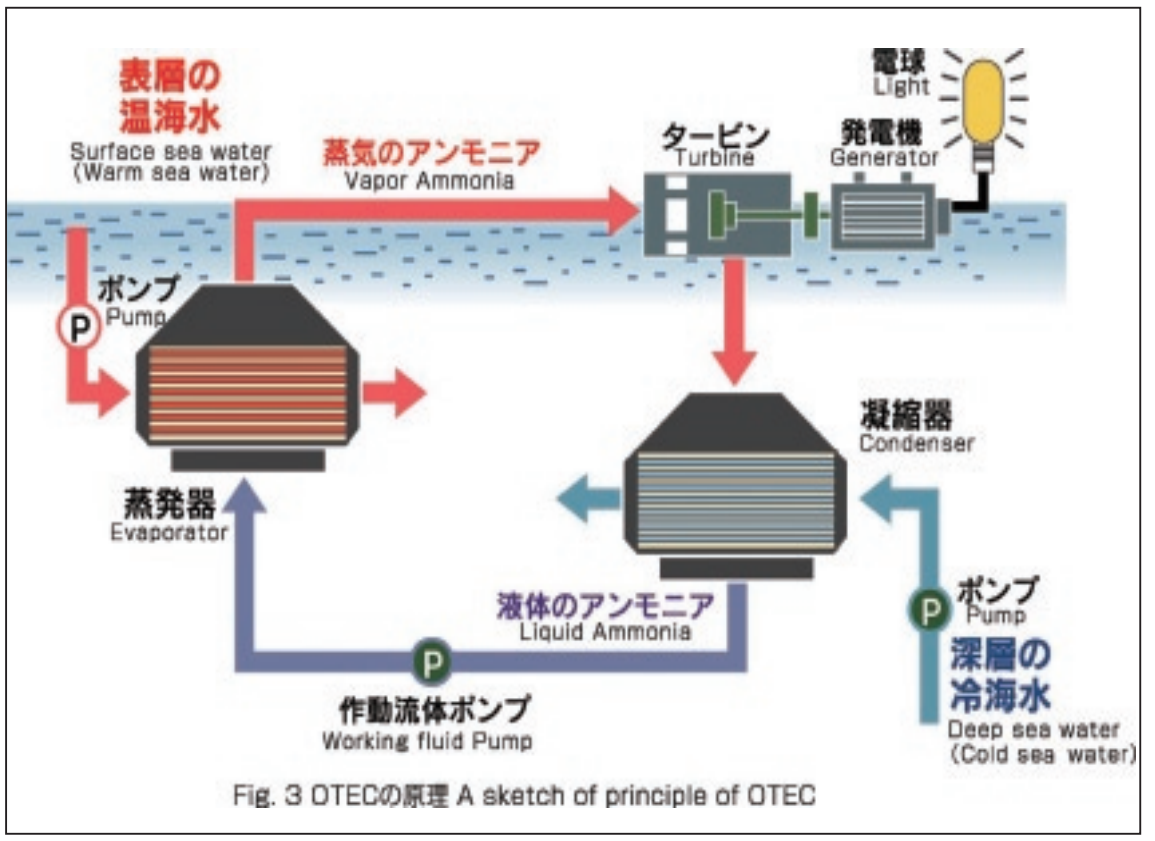
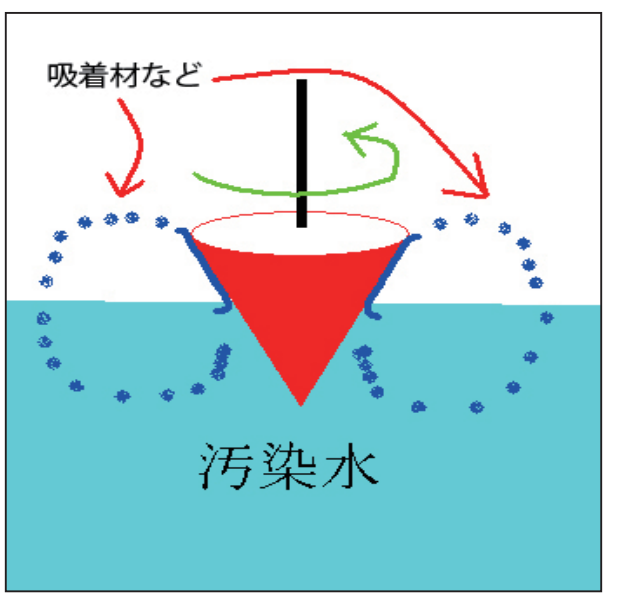


Fig. 3 OTECの原理 A sketch of principle of OTEC

提供：佐賀大学海洋エネルギー研究センター ”伊万里”

図２



足立 高弘　先生
1971年　京都府京都市生まれ
秋田大学大学院工学資源学研究科機械工学専攻
機械工学科准教授

AUP
AKITA Univ. Press

AUP通信

AUPの記者たちが毎回お届けする、オススメレポート。居酒屋、雑貨屋、本、など幅広く紹介するコーナー。

はっきり言って私は本を読むのが好きなほうではない。小説などは本当に心に「読もう」と決めない限り読むことはない。それでいてなぜ文系の学部にいるのか、そうおっしゃる方もいるかもしれない。しかし理系の学部の学生よ、「文系=読書好き」にならないことをここで一つ断っておきたい。しかし生協の書店で手にした本はこんな私を読書の世界へといざなった。

細野晴臣著「細野晴臣　分福茶釜」(平凡社ライブラリー刊)。氏は伝説的なバンド「はっぴいえんど」として高度成長期の日本の音楽シーンを席巻。その後かの「YMO」のリーダーとして日本中をテクノサウンドブームに包み、作曲家としても精力的に活動する日本を代表する「音楽家」である。

さて、この本は氏が長年の友人との対談を編んだものだがその中身が実に面白い。例えば氏は地球温暖化のライブに積極的に出演しているが「冷房を部屋で独り占めするのはもったいないので窓を開けて外にも涼しさを分け与えている。」のだそうだ。この本を読んでいると隠居した近所のおじいちゃんの話に耳を傾けている気分になる。読書嫌いでもこの本は気軽に読めるので是非手にしてもらいたい。

（畠山　昂大）

AUP
AKITA Univ. Press

秋田百聞

大学で働くことを選んだのだろうか。

初々しい気持ちで大学の門を叩いたのも束の間。誰もがあっという間に三年生の後期を迎え、進路選択を必要に迫られることになるだろう。公務員、民間企業、大学院、その他もろもろ道は多く存在するがいったいどこへ進めば良いのか、地元で就職するべきか都会に出るべきか、悩みは尽きない。

秋田大学国際交流課で働く宮崎舞さん（23）は、昨年まで当大学の教育文化学部国際言語文化課程日本・アジア文化選修に所属する学生だった。学生時代からずっと市内にある実家から大学まで通っている。生まれも育ちも秋田という、いわば秋田のサラブレッド的存在だ。宮崎さんはなぜこの土地で暮らし、秋田大学で働くことを選んだのだろうか。

宮崎さんは三年生の六月から公務員講座を受講していた。教師になるべきか迷いながらも講座を受講しているうちに、より向いていると感じる公務員の道へと進むことを決めた。長く苦しい勉強の期間を経て、大学法人の一次試験を突破。二次試験を受験するにあたり、一つの壁にぶち当たる。「秋田を出るべきか否か。」両親には秋田に残ってほしいと言われたが、宮崎さんはずっと実家暮らし。このまま外の世界を知らないで生きていっていいのかという思いがあった。その後、順調に試験は進み、無事に秋田大学の内定を得る。

就職先の秋田大学国際交流課では、外国人向けの冊子作りや協定校との連絡といった業務を日々こなしている。毎日覚えることがあり、学生時代と違って早起きしなければならない。しかし、だんだんと仕事に慣れてきたという手ごたえを得たり、出した案や制作した資料が褒められたりした時に、大変さ以上に嬉しさを感じると言う。また、秋田大学出身なので、土地や大学についての知識を仕事に生かすことができる。今後は、研修制度などに積極的に参加して仕事の力を付け、一つの分野でプロフェッショナルになれるような職員になりたいと、熱く語ってくれた。

「結局、馴染みの土地である生まれ育った秋田が好きだったんですね」と笑う宮崎さん。取材時は竿灯祭りに向け、大学職員で結成されている「竿燈会」に所属し練習に励んでいた。

学生時代から輝いていた持ち前の笑顔で、これからも元気に明るく学生や秋田を照らしていって欲しい。

（川村　巴）

極上チャンネル　学生チャンネル

検索

AUP×学生チャンネル

大学近くに模型店開店

8月下旬に大学近くのファミリーマート隣りに「元城(もとき)模型」が開店した。元城模型は県内でも珍しい鉄道模型に特化したお店である。「秋田には鉄道模型の専門店がない」と店主の冨谷さん。鉄道模型の専門店にすることで他店との差別化を図った。店内には模型を楽しむのに必要なパーツが十分に揃い入手が困難なパーツも取り扱っている。大きいおもちゃ屋さんですら鉄道模型の取り扱いを減少させている秋田において、このような店ができたことはファンにとってありがたいことだろう。「今後は店をアピールすることが第一」と冨谷さん。かつて隆盛を極めた鉄道サークルが存在した秋田大学。元城模型が鉄道サークル復活の起点になるのかもしれない。

（畠山　昂大）

AUP AKITA Univ. Press

陸上競技場 リニューアルオープン

秋田大学陸上競技場が改修され、9月5日にオープニングセレモニーが行われた。競技場は昨年秋から改修工事が行われており、内側のフィールド部分が人工芝、トラック部分がウレタン素材の全天候対応トラックとなった。以前から「風の強い日に砂ぼこりが飛んでくる」と近隣の住民から苦情が出ていたが、この工事により砂が舞うことなく、雨天後の使用にも対応できる。セレモニーには大学関係者、サッカー部員、陸上部員が出席し、学長・副学長・学生2名によるテープカットが行われた。出席した陸上部員は「長期間競技場での練習ができず苦労もあったが、雨でも使用できるようになって嬉しい。更にトレーニングに励んでいきたい」と話し、さっそく新しいトラックの感触を確かめていた。

（和田　陽佳）

AUP AKITA Univ. Press

AUP INFORMATION

東北アクティブレンジャー写真展

国立公園・国定鳥獣保護区・世界自然遺産地域などのパトロール等を行っている、アクティブレンジャーが撮影した、渾身の写真をご覧になれます。

日時：第１回「心に残る風景」
平成23年12月5日(月) ～12月27日(火)

第２回「あお」
平成24年1月5日(木) ～1月31日(火)

場所：秋田大学インフォメーションセンター

10:30～17:00

【問い合わせ先】
秋田大学企画広報課　018-889-3204

平成23年度秋田大学公開講座in東京

日本海側北部地域における震災とその対策について、防災・減災のあり方を首都圏へ発信します。

日時：平成23年12月20日(火)　13:30～16:00

場所:キャンパス・イノベーションセンター東京
※要予約

【問い合わせ先】
秋田大学地域創生課　018-889-2844

編集後記

先の震災が発生した際、大停電でインターネットも電話もメールも使えなくなったことは、皆さんの記憶にも新しいだろう。

あの時私は石巻にいるはずの友人や、仙台・東京方面に出かけていた先輩と連絡が取れずにいて、不安でもどかしくなり、絶望感さえ抱いていた。しかしそれと同時に、自分はそういった人たちなしでは生きていけないことを思い知った。

6月の上旬、私は想うところがあってAKITAIDの活動に参加し、気仙沼へボランティアに行かせていただいた。そこで現地の方々の優しさに触れた。私たちが彼らを想う以上に、彼らは私たちを想ってくれていたのだ。現地にはまだ余裕がない方もいらっしゃっただろうに、新品のタオルを無料で配ってくださり、さらに昼食の炊き出しまでしてくださった。

大きなものを前にしたとき、人間たったひとりでは無力だ。誰かと想い合い、足りない部分を与え合うことで優しさが生まれ、それがお互いの力になるのではないか。気仙沼の方々との交流で、私はそれを強く実感した。

何気ない日常の中でも、想い合い、与え合うことはできるはずだ。私はほんの少しずつ、できることから意識して実行している。もう少し、優しい人間になってみようと思う。

（佐藤　禎晃）

フォトグラファー　CM制作　秋田大学美人　商品開発　記者　AUP AKITA Univ. Press　新聞　雑誌　エディター　学生チャンネル

AUPの活動に興味のある方はaup@live.jpまでご一報ください。